

月夜野古窯跡群洞A支群の再考

神谷佳明・綿貫邦男

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

- 1 月夜野古窯跡群の概要
- 2 洞A支群の窯跡
- 3 出土した須恵器

4 月夜野古窯跡群における操業関係

5 洞A支群の操業年代について

おわりに

— 要 旨 —

月夜野古窯跡群洞A支群は1970年・1971年に月夜野町教育委員会によって発掘調査が実施され、1973年に報告書が刊行されている。この後、月夜野古窯跡群については沢入A支群や上越新幹線に関連する発掘調査で研究が進み、洞A支群の出土須恵器も基礎資料として重用された。さらに酒井清治氏による『須恵器集成図録』や群馬歴史考古同人会による『土器部会研究資料』に出土須恵器の実測図が再び掲載されているが、報告書に掲載されているものに限られていた。

こうした状況のなか、1990年代に関東地方の須恵器生産研究活動の一環として洞A支群の出土遺物を見学したが、月夜野古窯跡群なかでの洞A支群の位置付けにはより多くの実測図を提示する必要性がみられたことから、遺物を借用して実測を実施した。遺物の実測から時を経てしまったが、今後の須恵器生産、月夜野古窯跡群研究の基礎資料として公表しておくことが重要と考えた。本来なら遺構についての再検討や遺物写真も提示が必要であるが、諸事情により研究紀要での公表に至った。

月夜野古窯跡群は7世紀末から10世紀末にかけて操業していた須恵器生産地であるが、洞A支群については従前より9世紀前半に操業していたことが究明されている。今回の出土須恵器の検討でもこの時期を確認することになったが、前後する沢入A支群や深沢B支群との関係を明らかにすることができた。

キーワード

対象時代 古代

対象地域 月夜野古窯跡群、古代利根郡

研究対象 須恵器、須恵器窯

はじめに

筆者らは、1990年代に関東地方の須恵器及び須恵器生産の研究を目的とする生産史研究会の活動の一環として、県内の須恵器生産地から出土した須恵器について調査・分析を行ってきた。県内各地の生産地における出土須恵器を見学してきたなかで、月夜野古窯跡群の1970・71年に発掘調査が行われた洞A支群から出土した須恵器は、代表的なものだけが報告されていることがわかった。また、報告書への掲載サイズは約1/5であるため、詳細な形態は掴みかねる状態であったことから、再度、出土須恵器の実測、分析をおこなうこととした。

1 月夜野古窯跡群の概要

古代上野国における須恵器生産は、検出された窯跡の資料から6世紀代の太田市太田金山古窯跡群菅ノ沢窯跡が最も古い段階であるが、古墳や集落から出土する須恵器を概観すると5世紀末の段階から太田金山古窯跡群だけでなく、西毛地域の藤岡古窯跡群や観音山丘陵乗附(岩野谷)古窯跡群などの須恵器窯跡でも生産されたことが想定できる。

県内の須恵器窯は、藤岡市藤岡古窯跡群、高崎市吉井古窯跡群、高崎市観音山丘陵乗附(岩野谷)古窯跡群、安中市秋間古窯跡群、伊勢崎市舞台遺跡・光仙房遺跡、赤城南麓の前橋市樋越遺跡群八ヶ峰窯跡他、みどり市笠懸窯跡群、桐生市桐生古窯跡群と月夜野古窯跡群が知られている。

月夜野古窯跡群については、数地点において須恵器窯や工人集落、粘土採掘坑が発掘調査で確認されている。これらの調査順をみると、1937(昭和12)年に山崎義男氏によって洞A支群と真沢A支群で露出している窯跡の断面が調査されるとともに、周辺から採取された須恵器の報告が行われている。1970・71(昭和45・46)年には井上唯雄氏によって、今回再報告する洞A支群の窯跡3基が発掘調査され、報告されている。その後、1976～1979(昭和51～54)年には上越新幹線やそれに伴う周辺調査で、洞I遺跡、洞Ⅲ遺跡、藪田遺跡、深沢遺跡、藪田東遺跡の発掘調査が行われ、工人集落や粘土採掘坑が調査されている。その中では、洞Ⅲ遺跡2号竪穴建物でロクロピットとみられる遺構が検出され、工人集落との指摘がされている。

藪田遺跡及び藪田東遺跡では大規模な粘土採掘坑と竪穴建物群が検出され、ここでも工人集落との指摘がされている。また、1979(昭和54)年には、月夜野町の水道事業に伴う工事で沢入A支群の灰原が調査されるとともに、群馬歴史考古同人会による分布調査で須磨野A支群、深沢B支群、深沢C支群での窯跡が存在、または存在する可能性が報告されている。

その後、しばらくの期間この地域では開発行為が行わ

れなかったが、1990～1991年に深沢B・C支群の東側で深沢A～E遺跡、2012年に深沢Ⅱ遺跡等の集落遺跡が調査されている。これらの遺跡からは工人や生産と直接結びつくような遺構や遺物は検出されていないが、窯跡との位置関係から生産に関係していた集落と想定される。そして2014年に深沢B支群ではすでに道路の法面に窯跡が露出していたが、その地点でさらに拡幅工事が行われることになり、2基の窯跡本体と灰原が検出されている。深沢B支群の窯跡は、窯の形態が洞A支群の半地下式窯とは異なり、地下式窯が採用され、操業は9世紀第3四半期から10世紀第1四半期でも初頭に比定されている。

月夜野古窯跡群については、発見されている窯跡から出土した須恵器は沢入A支群の8世紀中頃が最も古いものであるが、古代利根郡の集落遺跡をみるとみなかみ町村主遺跡11号竪穴建物からは、月夜野古窯跡群産とみられる7世紀末から8世紀初頭に比定される須恵器が出土しており、この頃には操業が始まったと想定される。また、終焉については明確ではないが11世紀初頭が想定される。

2 洞A支群の窯跡

遺跡は、みなかみ町月夜野上組字洞に所在する。遺跡地は大峯山東麓に立地し、標高は460mである。窯跡は山裾の畑地からの比高6mの地点にある。その傾斜は16度と比較的急峻である。窯はこの傾斜の変更線の部分にまたがり、本体は急傾斜部分の先端につくりつけられ、それに接続する灰原の部分は緩傾斜部分に開く。本調査では3基の窯を発掘したが、3基は、主軸の方向、交錯状態、遺物の出土等から、その間には時間的な前後関係、占地と自然の関係等興味ある問題が提起された。洞窯跡報告書本文では3基の内、1970年の調査をⅠ号、Ⅱ号窯と呼称し、71年の調査をⅢ号窯として以下記述されているが、窯番号についてはこの後に刊行された『月夜野古窯跡群』に従い算用数字に置き換えてある。なお、山崎氏が調査した洞A支群については井上氏が調査した3基の窯跡とは異なる。この窯跡について4号窯として新たに遺構番号が付与されている。なお、4号窯は瓦兼用窯とみられ、出土遺物も9世紀末から10世紀初頭であり、操業はこの時期と想定できる。

遺構の概要について報告書より抜粋すると以下のとおりである。

1号窯 山裾の傾斜変更線に接して構築されており、すぐ北は急峻な山腹につながる。主軸の方向はN-57°-Wで2号とは大きく異なっている。床面の傾斜は16度内外あり、ほぼ地形の傾斜と合致している。しかし、遺構を埋没している土層を分析してみると、当時の自然面は現在ほど急ではなく、遺構がつくられて後、地形に変化があったものと推察される。

窯は焚口部が崩壊し、煙道部が未掘削のため、全貌は明かではない。規模は幅が1.1m、長さは3.72mを測る。形状はほぼ長方形を呈し、焼成部面は平坦で、床面、壁面は共に焼け方があまり強くない。確認面からの深さは87cm内外であり、いわゆる半地下式の無段登窯で天井部はかまぼこ状に構築されていると推察されている。

壁体の焼け具合からみて、遺構の南に焚口を有していたとみられる。特に1m強の部分の面壁が強く焼けており、それを裏づけている。しかし、他の部分は壁体が崩れてしまい、残っていたものでもあまり強く焼けておらずその使用期間があまり長くなかったことを推察させる。

遺物は、多数出土しているが出土の状態は壁奥の部分ではほぼ窯床面に接して認められたが、南にいくに従い、黒色土を窯床との間に挟んだ状態で認められた。このことから、おそらく山から押し出された土砂の流入によりこの遺構が埋められたものと考えられ、遺物はその土砂により窯床から浮いた状態になったものと考えられる。さらに、遺物の焼成温度を考えると比較的低温によるものが窯の奥部にいくに従い多くなり、赤焼けのボロボロの不完全焼成のものがたくさん見られた。

これらのことから、本窯は須恵器焼成中に急に降雨によりおしだされた山砂に埋没したものと想定される。そのために本遺構からの出土遺物が多かったものと思われる。

2号窯跡 1号窯の南側の燃焼部西壁に煙出し部分を接して検出された。主軸の方向はN-24°-Wで、現在の地形における等高線の走向とほぼ直交する。形状は1号窯と同様であるが煙道部及び灰原部分も確認され、その全容が把握されている。

規模は巾90cm、長さ3.6m、灰原部巾3.5m、長さ1.4mである。燃焼部の構造は西壁、東壁ともやや崩落し、原形をとどめていない。床面までの深さは確認面から40cm内外であり、窯床は平に整えられ、強い被熱を受け青色を帯びている。焼成部の一部にはこの面の上に川砂を3～5cm程意識的に敷いた部分もあり、土器片が概ねこの上面から出土した。壁面はほぼ直に立ち上がり、窯床の傾斜は18°内外である。

燃焼部から2.2mほど奥へいった部分では両側壁面に4個を使用した石積が認められ、この部分が前述の山砂を押し出す以前の傾斜の稜線に当たっていたものと推察されるところから長期間の使用に際して、壁面の崩落を防ぐことをねらった補強と考えられる。燃焼部床面には不明瞭ながら舟底型のおちこみが認められる。

遺物は、前述のようにほとんど完形品はなく、しかも少量出土したのみであるが、甕の破片が特にめだった。出土位置では西壁の石積みから奥の窯床が著しい。

以上の所見からすれば、本遺構は比較的長期間にわ

たって使用されたことが明かであり、更に1号窯との重複の状態からみて時期的に1号窯に後出すると推察される。即ち現在の等高線と主軸の方向が直交すること、壁の後補の石積みが以前の自然面と考えられ、1号窯の焚口部はその部分に位置すること等から、1号窯が土砂に押し流されて埋没し、土砂が堆積して新しい傾斜面を形成した後に2号窯を設置したものと推察される。

なお、灰原の部分からも土器の出土が少ない。平面形態はラッパ状に開く部分も短いことから、自然傾斜にそって下方に排出されたものと考えられる。これを裏付けるように、この南方10mの地点の崖断面にも灰や土器の堆積が認められた。

3号窯跡 第1次調査(1970年)で発見された1・2号窯跡の東方7mの地点に発見された。形状は半地下式登窯で地形の傾斜面に沿って地下に細長く斜坑を掘り、坑の下端に燃焼室と灰原を付し、上り勾配に焼成部、煙道部を付したものである。

窯の主軸の方向はN-5°-Wとほぼ南北の軸線と平行している。傾斜は18°内外であり、ほぼ地形の傾斜と合致している。しかし、部分的にみると当時の地表面からみて煙道部、焼成部は比較的浅く、逆に燃焼部は深く掘り込まれ、窯底の傾斜を大きくする配慮がうかがわれる。

全体の平面形状は徳利状に燃焼部がくびれ、焼成部を広くとったもので、灰原はラッパ状に大きく開いている。各部の概略を次に記すことにする。

煙道部は、土器の出土状態からみて窯の先端部70cmほどのところから煙突部までの間とみられる。

窯底部は青灰色を帯びており、この部分から急に傾斜が強く上がり勾配になっている。煙突孔は確認できないが、現状からみておそらく20cm内外の規模をもっていたとみられる。地上部分は石組になっていたらしく、奥の一石が固定され強く焼けていた。窯底部は粘土を張ったようにみられ、その層が10cm程の厚さで強く焼けている。そのすぐローム層(地山)に接し、15cmほど強く焼けている。煙突部分は「とくに強く被熱を受けており、煤が充満していた」とされている。

焼成部は、中央部にややふくらみをもつが壁はほぼ直に立ち、その表面を粘土でおさえている。この粘土は窯底にまで及び、表面は強く焼かれていたため、あたかも石のように青灰色を呈し、堅緻にガラス質の成分の融出がみられるまでになっている。

特に壁は中央部分で多少の出入りをみせ、「炎返し」の様相を見せている。窯底はカマボコ状を呈し、最大幅は80cm内外あり、掘り込みは現地表下で50cm、当時の地表下は30cmほどの断面である。天井はすでに崩壊しており、その存在を確認することはできなかったが、おそらく壁体を地下に、天井を地表に築いたためとみられる。

遺物は窯底に直接接したものが多く、窯廃棄時期のも

ので、ほとんど底部回転糸切り無調整の杯及び椀、蓋等の供膳具が中心である。

燃焼部は、壁の両側に石を平積み積み上げ、その崩壊を防止している。現状では東壁三石、西壁二石であるが、西壁は中央の一石が崩れたとみられるもので、当時は両側とも三石あったものと推察される。

焼成部の規模と比較して傾斜がゆるやかになっている。堅牢さを増すために掘方の内側に石を築き、その間に粘土でつく間詰めをし、その表面に粘土を貼る手法をとっている。しかし、これは構築当初のものではなく、あとから補修されたものとみられることも可能である。このことは、本窯跡が比較的長期間にわたって使用されたことが推察される。

灰原部は、全体的に焚口からラッパ状に開く。特に炭化物及び有機物を含む黒色土が堆積しており、その中に多くの遺物が含まれているが、層序的な堆積は確認されなかった。これは前面が急傾斜のため順次押し流されたためと思われる。焚口前面西側には石が崩れていたが、これも燃焼部の壁に積まれていたものであろう。

以上3号窯も、2号窯と同様の方向を示しているが、平面形で燃焼部がくびれをもつ点で多少相違している。またその規模が小さいことに特徴を有している。

なお3号窯の傾斜上部に焼土及土器が出土したが、これは方向からみて1号窯から出土したものと思われる。この部分はトレンチによる調査が行われ、第1トレンチと呼称されている。

3 出土した須恵器

今回、洞A支群1号～3号窯(以下、洞A支群と略す)から出土した図示した須恵器166点と瓦数点を再度実測(瓦については別項を予定)した。これらの須恵器は1号～3号窯から出土したものであるが、みなかみ町の担当者によると数回にわたり保管場所が移動されていたことや遺構図の保管場所が不明であることから、出土窯については分からない状態であった。なお、須恵器には「N0.」、「第1トレンチ」、「洞2次」等の注記があることから遺構図との照合は可能とみられる。また、報告書から「第1トレンチ」が1号窯灰原、「洞2次」と注記された遺物は3号窯からの出土であると判断できる。なお、紙幅の都合上、杯・椀のロクロ右回転、底部が回転糸切りの拓影図は省略した。なお、縮尺は原則1/3を原則とし、一部大型品は1/4とした。

洞A支群から出土した須恵器には、杯・椀・盤・鉢・短頸壺・長頸壺・横瓶など各種器種と瓦などが見られる。

これらの器種は形態による分類が可能である。ここでは器種。形態別に記載する。

杯蓋・杯身

杯・椀蓋 杯・椀に伴うものが出土している。形態は陣

笠状を呈する器高の低いA、天井部に丸みをもち、口縁部が直立する器高の高いBの2形態がある。なお、一般的に蓋は有台の形態に伴うものであるが、杯に有台の形態が出土していないことや蓋の出土量に対して椀の出土量が少ないことから無台杯・椀にも蓋を伴う個体が存在したことが想定できる。

蓋A(1～16) やや扁平な個体も存在するが、これらは乾燥や焼成時に器形が潰れたものと見られる。摘は擬宝珠状と環状、その中間的な形態の3形態がみられる。これら蓋Aは杯または椀に伴うものと想定される。

蓋B(17・18) 出土量は少なく一見短頸壺に伴うのではないかとみられるが、上野型短頸壺蓋も出土していることから、他器種に伴う可能性が想定される。

杯 全て無台でA、B、C、Dの4形態に大別できる。

杯A(19～35) 前段階から継続する形態、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもたず、丸みをもって移行する。全体的に器高は低く器高/口径の値は0.30以下がほとんどである。ロクロ回転方向は右回りが大部分であるが3点左回転がある。底部は図示した17点中14点が回転糸切り無調整、19・35が回転ヘラ削り、28・29が回転糸切後周囲にヘラ削りを施している。なお、底径/口径の値は平均0.56であるが、0.60近くと0.50～0.55にややまとまりがある。

杯B(36～53) 杯Aと比較するとやや器高の高い形態、洞A支群では主体となる。器高/口径の値も0.30以上である。ロクロ左回転は53の1点だけである。底部から体部下位が疑似高台状を呈し、やや腰が張る状態で立ち上がり、口唇部が僅かに外反する。なお、底部はすべて回転糸切り無調整である。

杯C(54～80) 杯A・Bが体部に丸みをもつものに対して杯Cは底部から体部まで比較的直線的に開き、体部と口縁部間に弱い屈曲をもつ。さらに口縁部が直線的なa、口縁部が外反するbに区分できる。ロクロ左回転は25点中9点33%とやや多い。なお、底部はほとんど回転糸切り無調整であるが、77は回転ヘラ削りが施されている。

杯D(81～107) 杯Cに近いが体部から口縁部まで直線的に開く形態である。底径/口径は平均0.56、0.50～0.64と差があるが、0.50と0.60に近い値にまとまりがある。ロクロ左回転は29点中5点である。底部は回転糸切り無調整である。

椀・盤・高杯・鉢

椀は無台と有台の2形態があり、無台はA～Dの4区分、有台はA～Cの3区分に大別できる。食膳具は杯・椀の他、盤・高杯がある。鉢は貯蔵や調理用とみられる。無台椀A(108～111) 杯Dの器高を高くした形態。底部は杯Bのようにやや疑似高台状になるものもある。なお、111の内面底部に窯印とみられる刻印がある。これは報告書挿図11の写真にも同じものがあるが、報告書のもの

と111が同一か否かは確認できなかった。

無台椀 B (112) この1点だけである。体部下半に丸みをもつ形態、口縁部は欠損のため不明である。

無台椀 C (113) この1点だけである。無台椀 A に類似するが体部がわずかに膨らみ、口縁部が外反する。

無台椀 D (115) この1点だけである。コップ状を呈し、底部は回転ヘラ削りである。

有台椀 A (116～124) 体部から口縁部が比較的直線的な形態、122～124は有台椀 B に近い様相もあるが体部の屈曲点の下位の底部近くになることから A に区分した。

有台椀 B (125～127) 稜椀に近い形態であるが稜の位置が稜椀のように高くなく、口縁部はあまり開かない。

有台椀 C (128) 口縁部が外反する形態。一見すると9世紀末から10世紀初頭に位置づけられ、4号窯の製品が混入した可能性がある。

盤 (129～133) 盤は底部まであるものに高台が貼付されており、すべて有台であるとみられる。蓋と混乱する形態もあるが、高台内部の整形が粗雑なことから盤と判断した。形態は体部が直線的に開き、口縁部が直立する A (129～131) と体部に丸みをもち、口縁部がやや開ききみに立ち上がる B (132・133) の2形態がある。

高杯 (134) この1点だけである。脚部だけのため詳細についてはわからないが、この時期の高杯の杯部は杯蓋を逆さまにした形態と想定される。

鉢 (135～144) A・B・Cの3形態に大別できる。Aは逆台形状を呈し、口縁部が比較的直線的、Bは所謂「鉄鉢」状を呈する。Cは口縁部下に頸部を作り、一見すると甕に近い形態であるが器高が低いことから鉢に区分した。鉢 C は深沢 B 支群でも生産が確認され、集落遺跡では生品西浦遺跡9期以降に出土が確認されており、洞 A 支群から生産が始まった器形とみられる。

瓶・壺・甌・甕

短頸壺 (145・146) 蓋と壺の各1点を図示した。蓋は摘を欠くが天井部端部に凸帯と鐳が貼付された所謂「上野型」である。壺は口縁部が短く直立し、胴部は丸みをもつ形態である。胴部下半から底部は欠損のため不明である。

長頸壺 (147～150) 口縁部や底部から胴部片のため全体像は不明であるが、ロクロ成整形により、胴部が長く上半に丸みをもつ形態で口唇部下に凸帯が作られる。

横瓶 (151・152) 図示は2点が可能であった。ともに胴部の一部で151は成形の最後、胴部を閉塞する側、152は作り始め側である。外面は平行叩き、内面は無文のアテ具痕が残る。

横瓶は古墳時代6世紀前半に生産が始まった器種である。9世紀後半の竪穴建物からも出土例があり長期にわたって生産されていたが、長頸壺や平瓶のように形態の変化があまりみられない。しかし、深沢 B 支群では出土

しておらず生産が終焉していたとみられ、洞 A 支群の段階で生産が終わったとみられる。

甌 (153・154) 図示は2点が可能であった。ともに口縁部から胴部上位片である。口縁部は上半で外反し、口唇部は上下に引き出される。口縁部下に鐳が貼付されている。底部の形態は不明である。周辺や集落遺跡から出土している同形態としては、藪田遺跡5区42号土坑や戸神諏訪遺跡(Ⅲ)16号竪穴建物からの出土があり、この2点はともに底部は単孔である。なお、形態は類似するが凸帯が貼付されていない藪田遺跡5区41号土坑出土は底部が梯子状、洞 I 遺跡包含層出土は底部が十字状の四孔である。

甕 (155～169) 全体の形態から2形態に大別される。

甕 A (155～162、167～169) 口縁部と胴部の形態から a と b に細分できる。甕 Aa は胴部が長い球状に作られ、叩き締め成形で外面は平行叩き、内面のアテ具は月夜野古窯群共通の無文が使用されている。頸部は胴部径の1/2ほどで頸部に口縁部を接合させる。口縁部は比較的高い形態である。底部は154・161・162にみられるように丸底ではなく平底である。口縁部は155～160の無文と167～169の波状文が施されるものがある。甕 Ab は口縁部が短く、胴部は Aa より球状に近いとみられる形態(163・164)。

甕 B (165・166) 口径と胴部径に大きな差がない形態。胴部の成形は Aa と同様に叩き締め成形で外面は平行叩き、内面のアテ具は無文が使用されている。

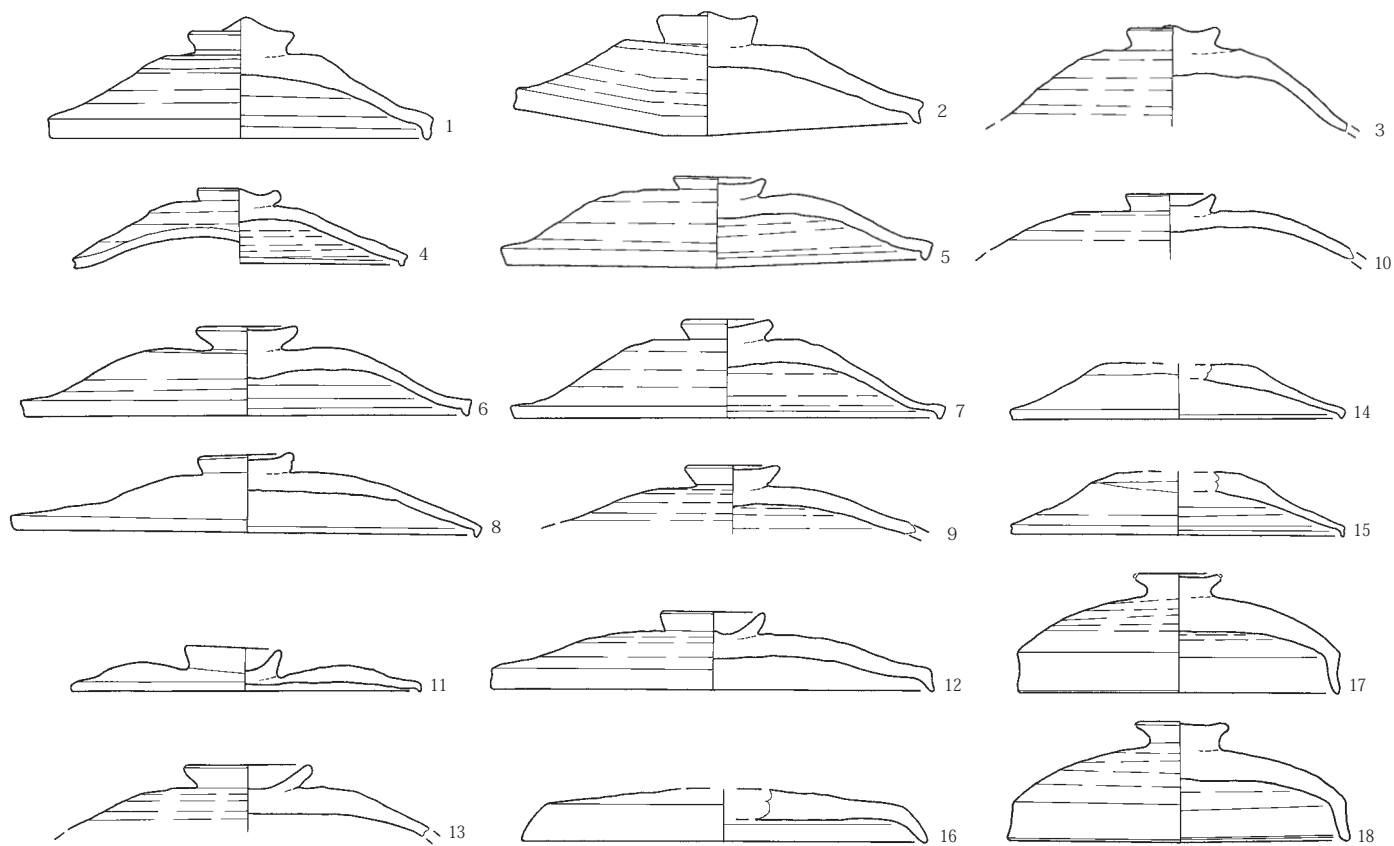
なお、Ab・Bは頸部下の胴部上位までロクロ整形が施されている。

4 月夜野古窯跡群における操業関係

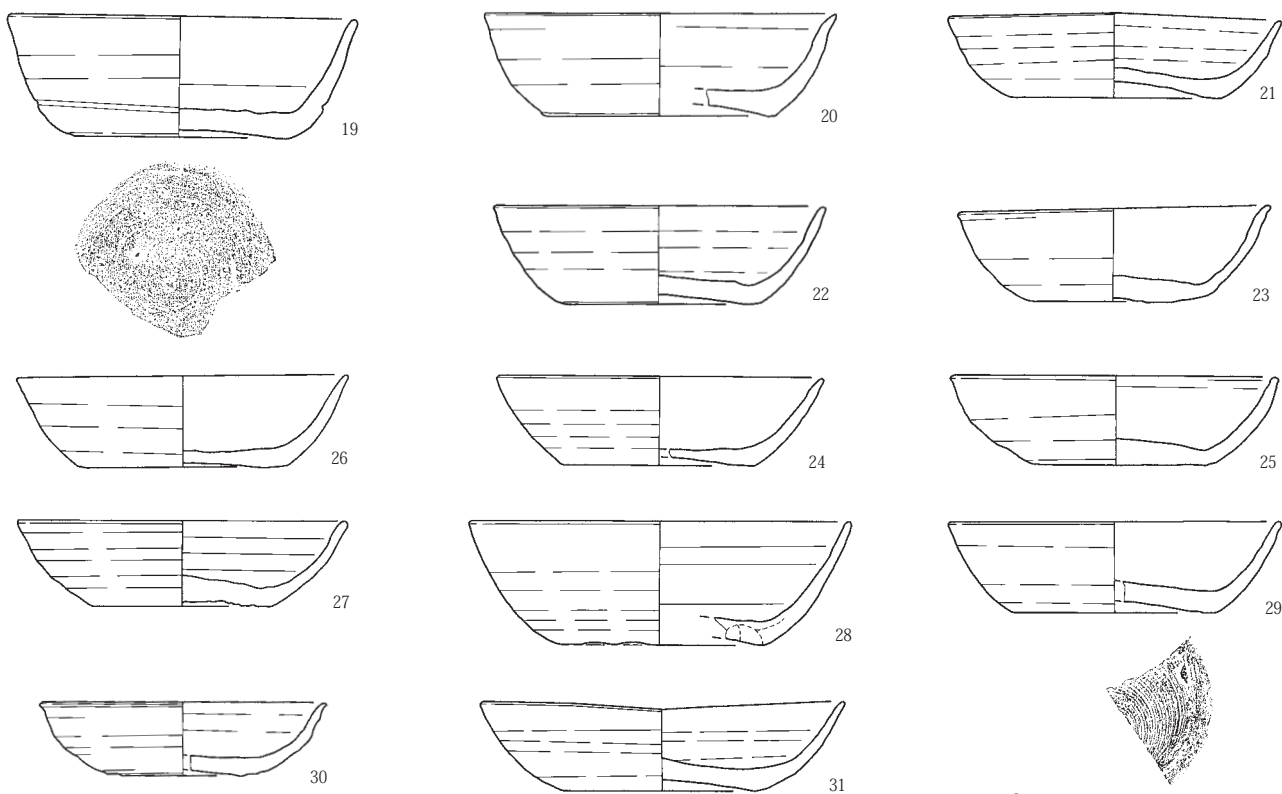
須恵器の前後関係については出土個体数が最も多い杯で検討するのが有効と考える。洞 A 支群3基の窯からは A～D に区分した個体が出土しているが、それぞれの窯からの比率はわからないため一括で検討する。洞 A 支群については以前より9世紀前半に位置づけられ、8世紀後半の沢入 A 支群、9世紀後半から10世紀初頭の深沢 B 支群の間に位置づけられている。ここでは灰原が調査されている沢入 A 支群と窯と灰原が調査されている深沢 B 支群の間における継続性や間隔の有無について検討する。

沢入 A 支群との比較では、洞 A 支群の杯 B～D のような器高が高い形態が出土していないことから前段階から継続する個体である杯 A で行う。沢入 A 支群と比較すると沢入 A 支群はすべて底部が回転ヘラ削りに対して洞 A 支群は大部分が回転糸切り無調整で一部に周囲ヘラ削りが施されている。体部は沢入 A 支群では底部から緩やかに移行するが、体部から口縁部がほぼ直線的であるのに対し、洞 A 支群の杯 A は体部に丸みをもつ形態である。

杯蓋

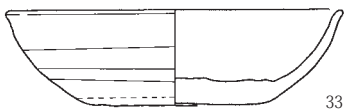
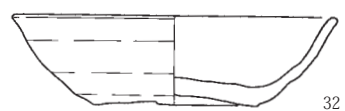


杯A

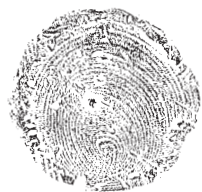
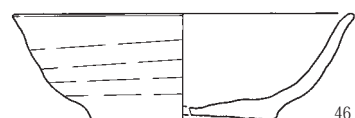
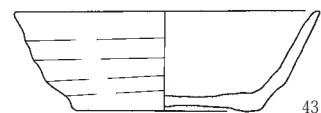
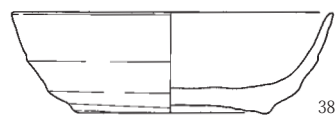
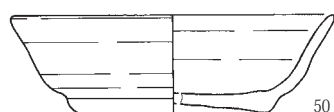
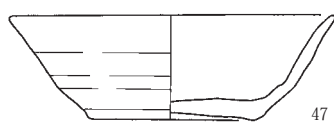
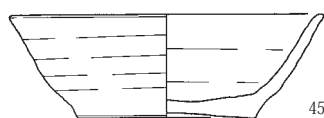
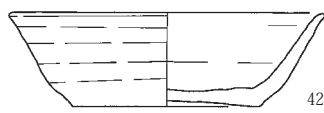
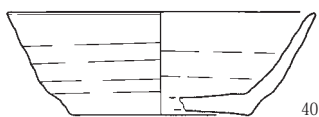
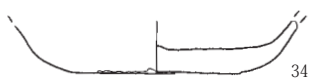
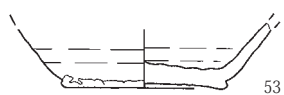
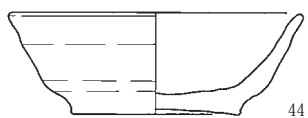
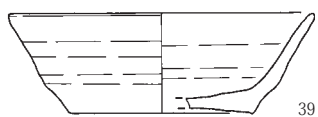


0 1 : 3 10cm

第1図 出土須恵器実測図(1)



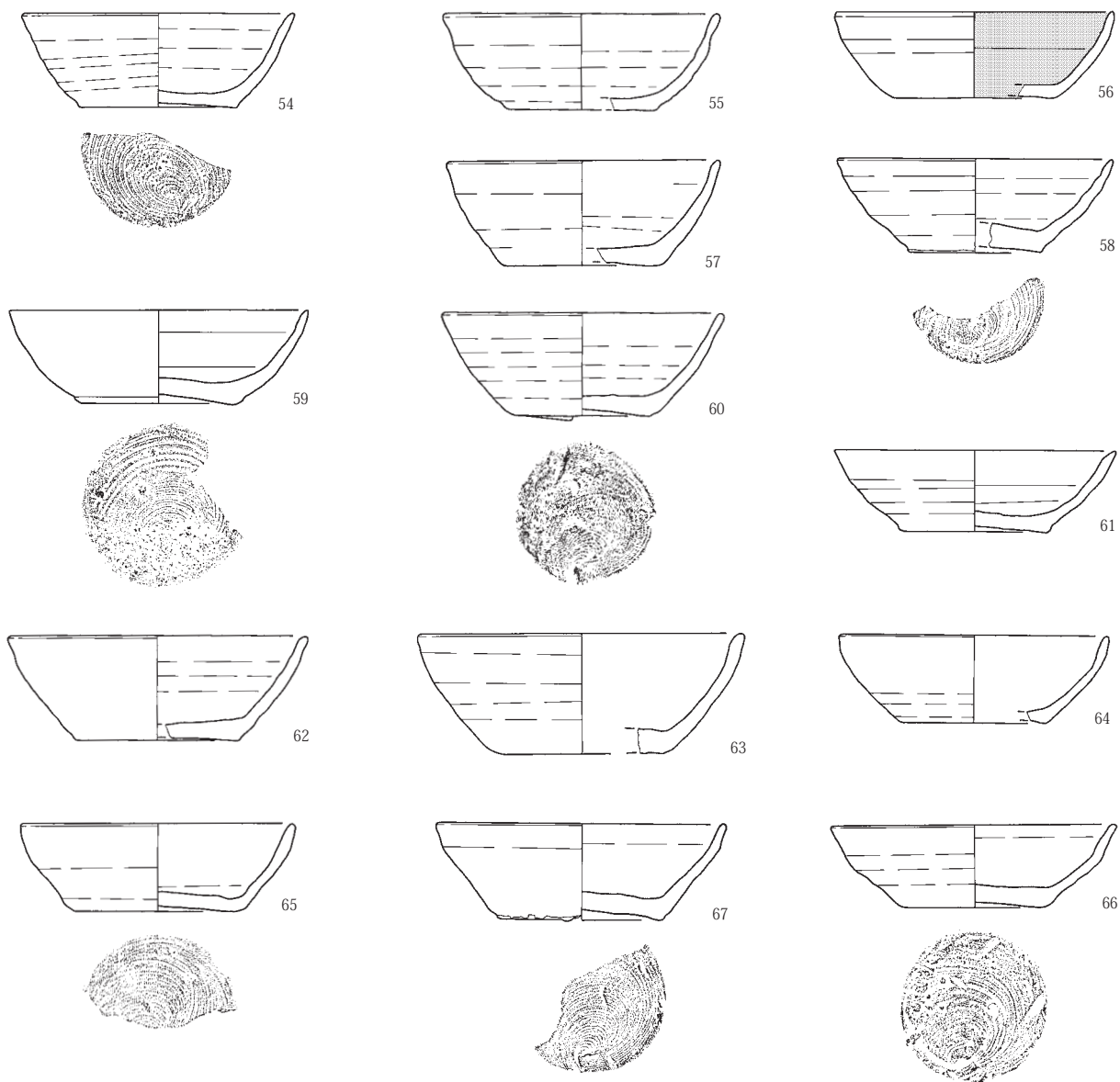
杯B



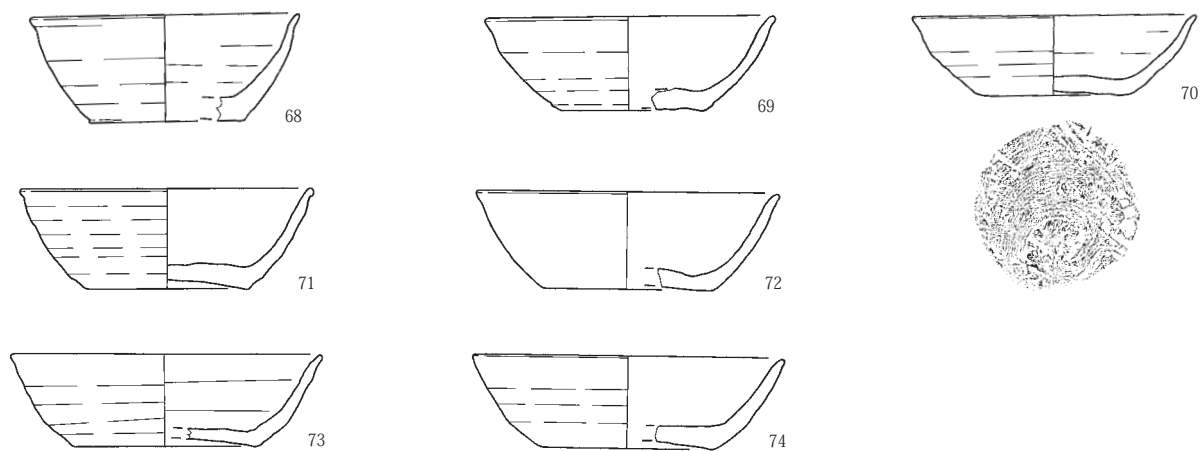
0 1 : 3 10cm

第2図 出土須恵器実測図(2)

杯C a

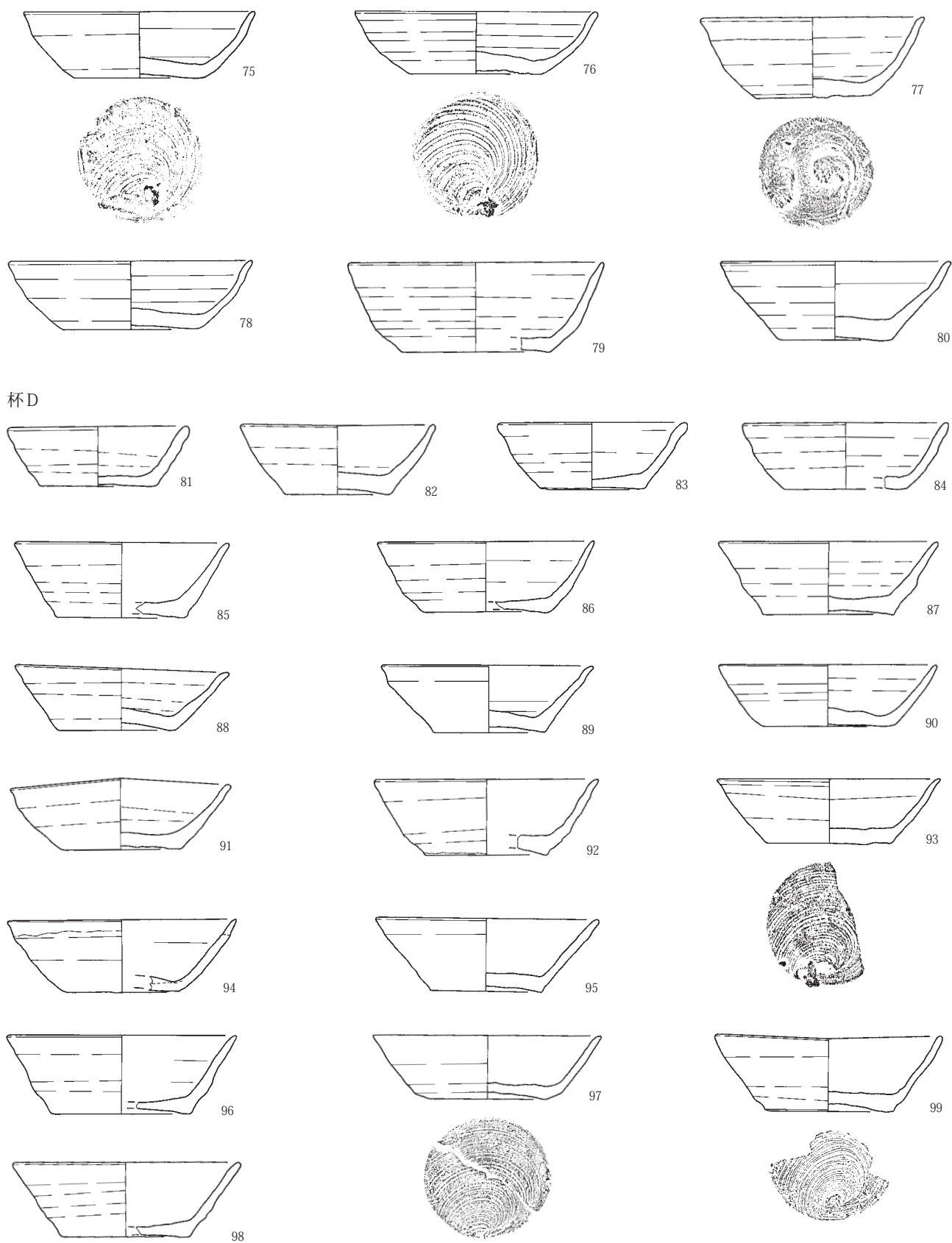


杯C b



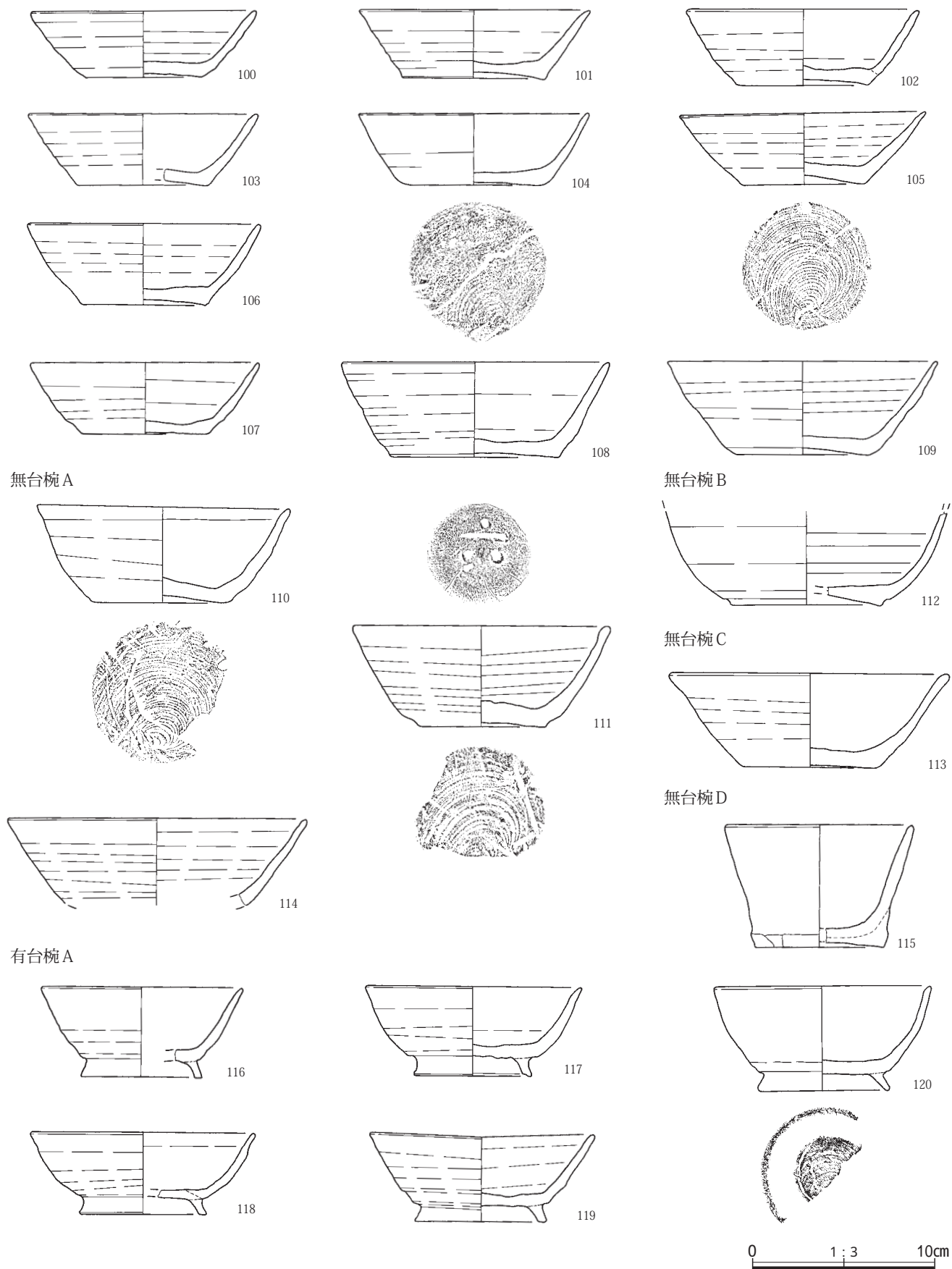
0 1 : 3 10cm

第3図 出土須恵器実測図(3)

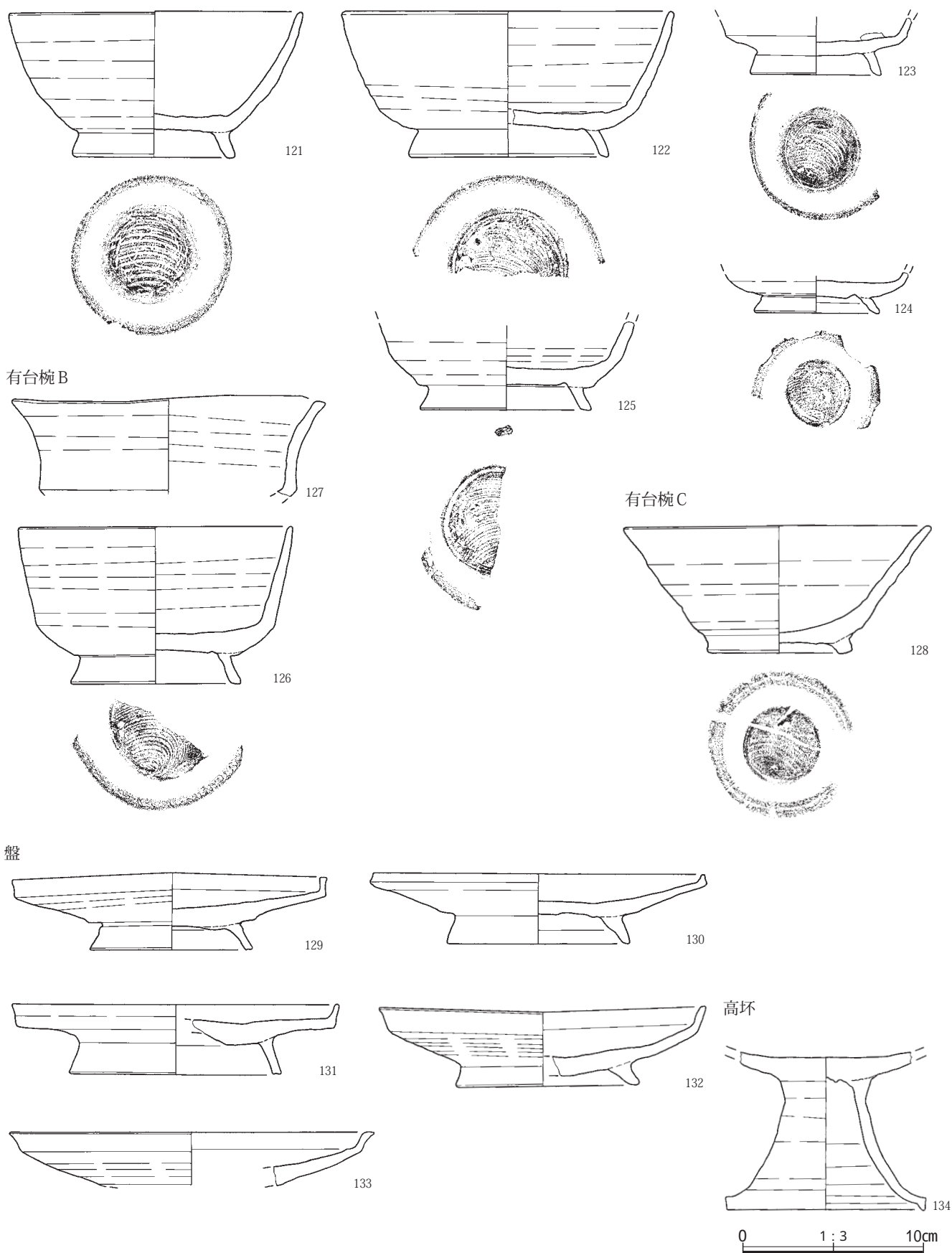


0 1:3 10cm

第4図 出土須恵器実測図(4)

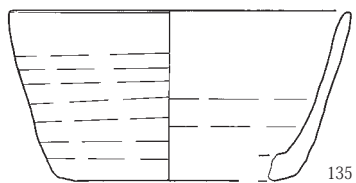


第5図 出土須恵器実測図(5)

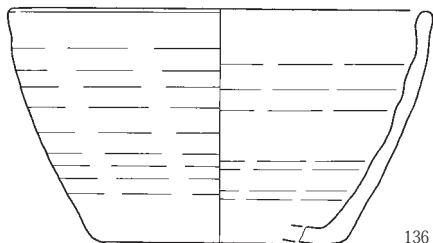


第6図 出土須恵器実測図(6)

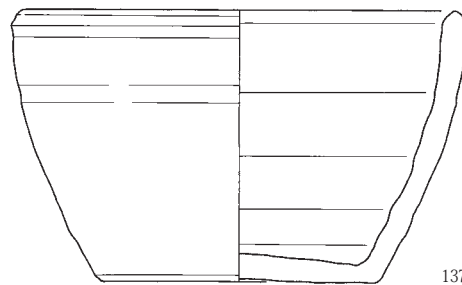
鉢A



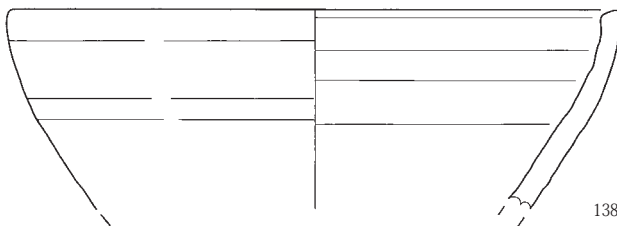
135



136

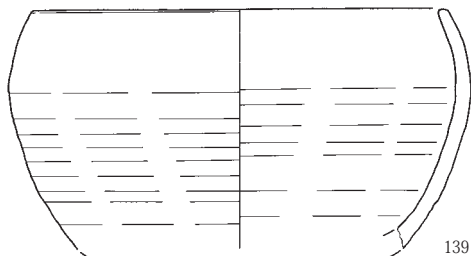


137



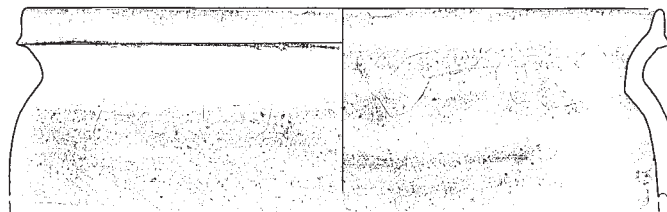
138

鉢B

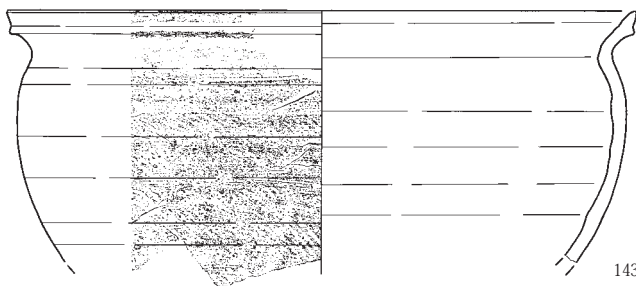


139

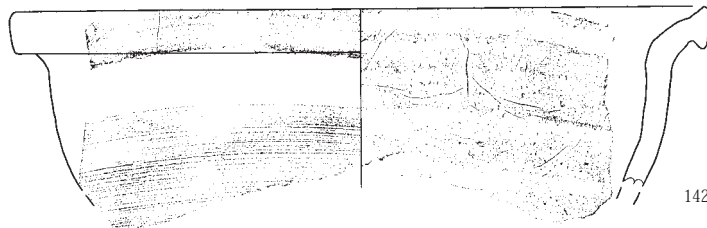
鉢C



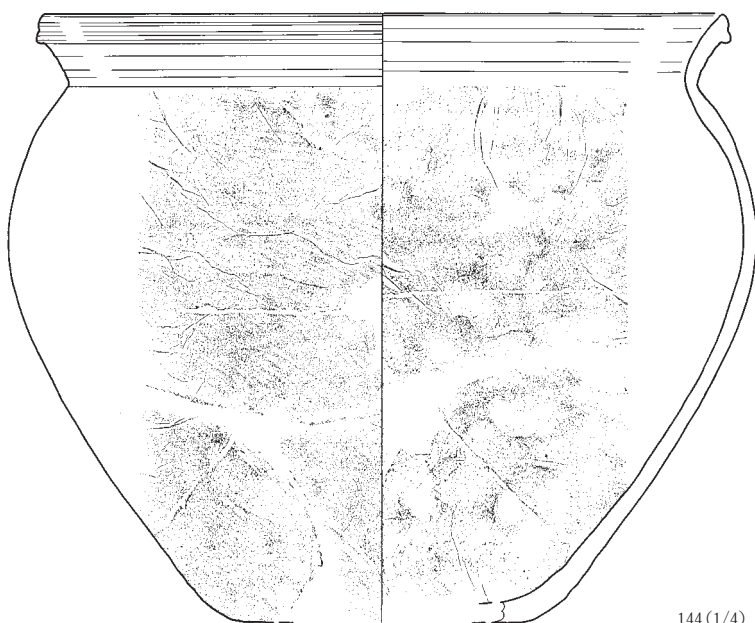
141



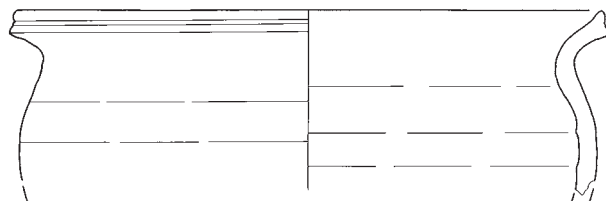
143 (1/4)



142

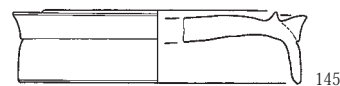


144 (1/4)

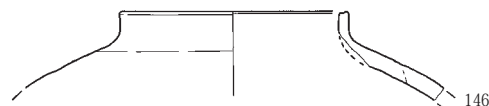


140

短頸壺



145



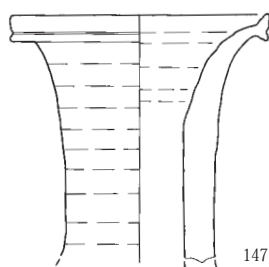
146

0 1 : 4 10cm

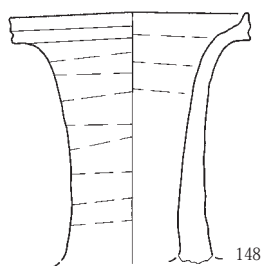
0 1 : 3 10cm

第7図 出土須恵器実測図(7)

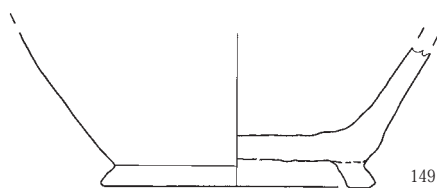
長頸壺



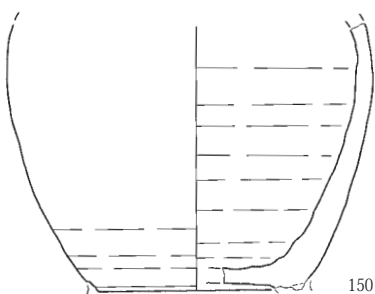
147



148

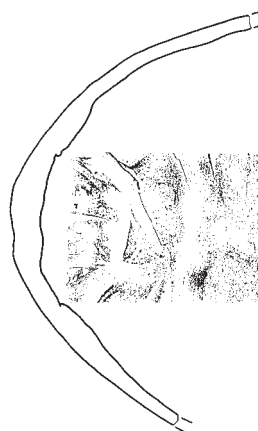


149



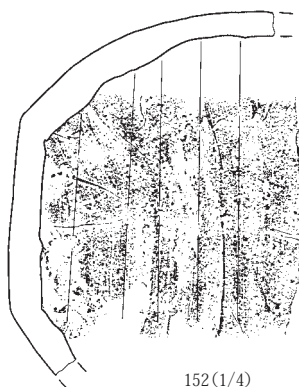
150

横瓶



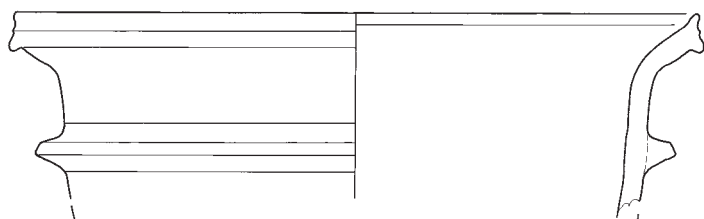
151(1/4)

横瓶

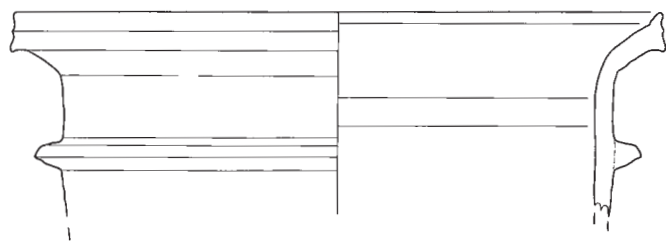


152(1/4)

甗



153(1/4)



154(1/4)

0 1 : 4 10cm

0 1 : 3 10cm

第8図 出土須恵器実測図(8)

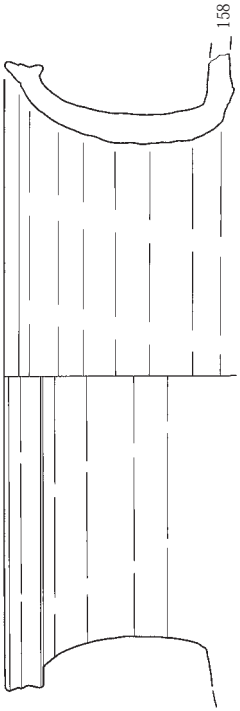
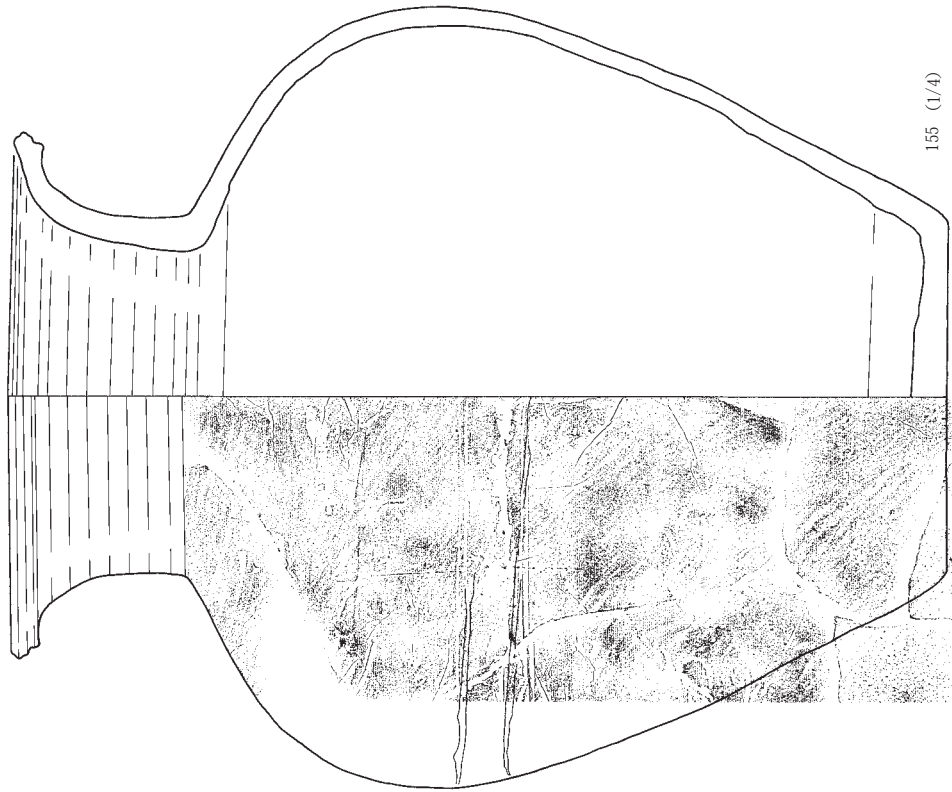
さらに底径/口径の値も沢入A支群が0.54~0.71、平均0.66と平均0.56、最大値0.65の洞A支群とは大きな差がある。

以上のような点から操業時期については、洞A支群が後出であることは明確で、さらに底径/口径の値からは操業時期に間隔があることが想定できる。

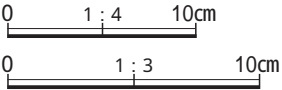
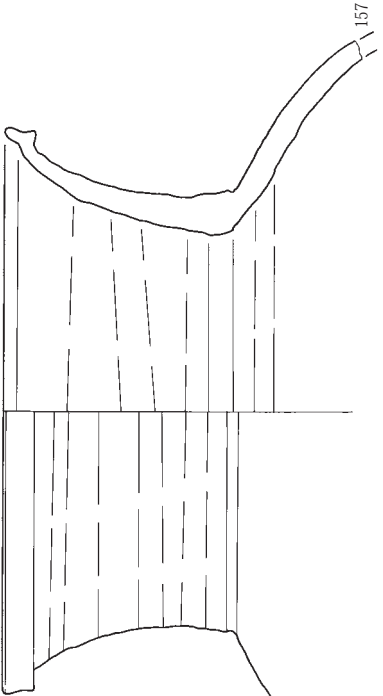
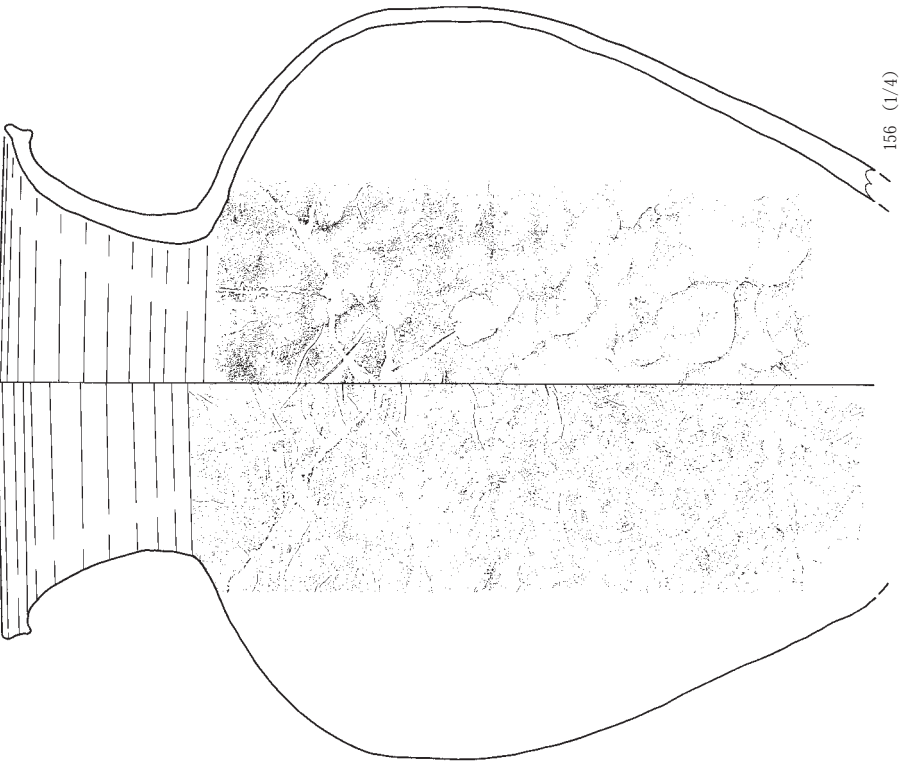
深沢B支群との比較は、全体を見ると深沢B支群では1号窯、2号窯、5号窯(灰原)から体部に丸みをもち口縁部が外反する深沢B支群分類杯B、5号窯からは灰釉陶器皿を模倣したとみられる口径の小さい皿が出土している。こうした状況を見ると洞A支群より後出であると言える。

杯をみると洞A支群杯Aに相当する個体が出土しておらず、疑似高台状の底部を特徴とする洞A支群杯Bが深沢B支群では杯Ac、体部から口縁部に弱い屈曲を有する洞A支群杯Cが深沢B支群杯Ab、体部から口縁部にかけて直線的に開く洞A支群杯Dが深沢B支群杯Aaに対応することになる。

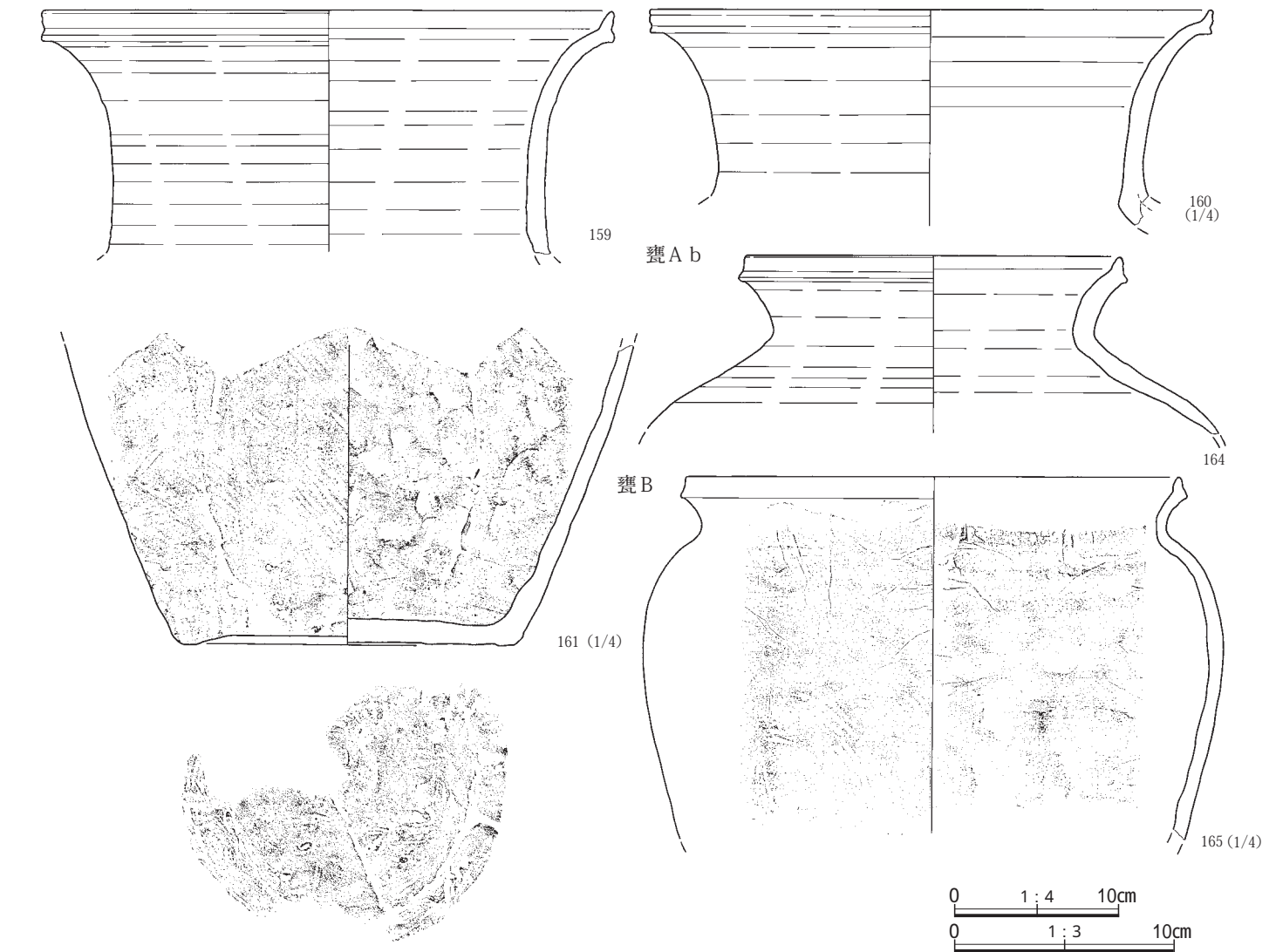
深沢B支群では窯本体を調査した1号窯と2号窯から深沢B支群杯Aは出土しておらず、口縁部



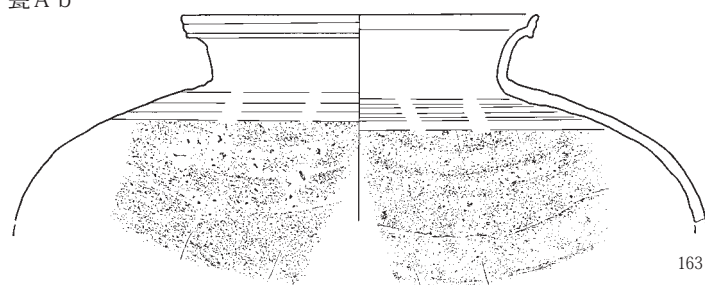
第9図 出土須恵器実測図(9)



甕A a



甕 A b



第10図 出土須恵器実測図(10)

が外反する深沢B支群杯B形態だけであり、4号窯や5号窯より後出と言える。深沢B支群杯Aは灰原を調査した4号窯と5号窯からの出土である。ここから出土した深沢B支群杯Aa～杯Acの底径/口径の値は杯Aaが0.56、杯Abが0.53、杯Acが0.49であり、深沢B支群杯Aa・Abは洞A支群杯D・Cとほぼ同様な値である。このような底径/口径の値からは前後関係は認められるが、沢入A支群との間でみられた時間的に差がない関係であったと想定できる。

5 洞A支群の操業年代について

洞A支群の操業年代を示す資料を抽出するのは難しいが、前項のように深沢B支群の操業以前に行われていたことは明らかである。深沢B支群の操業開始年代は生品西浦遺跡や戸神諏訪遺跡など月夜野古窯跡群から須恵器が供給された古代利根郡内の集落遺跡での土器編年に対比した結果、9



第11図 出土須恵器実測図(11)

第1表 出土須恵器観察表

NO.	器種	注記	残存	口径	底・口径	器高	底/口	高/口	色調	焼成	技法・特徴
1	杯蓋		1/3	15.0	4.2	4.7			灰	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
2	杯蓋	洞54・56	2/3	15.8	3.9	4.9			黄灰	還元焰	ロクロ右回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
3	杯蓋		1/3		3.6				灰白	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
4	杯蓋	洞46・50・51	1/2	13.2	3.2	3.1			灰白	還元焰	ロクロ右回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
5	壺蓋	洞65	完形	16.5	3.7	3.6			灰白	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
6	杯蓋	洞84	2/3	17.4	4.0	3.5			灰	還元焰	ロクロ左回転。
7	杯蓋	洞85	1/3	16.7	3.6	3.9			灰	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
8	杯蓋	洞67・70	2/3	18.0	3.9	3.1			黄灰	還元焰	ロクロ右回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
9	杯蓋	洞84	1/2		3.5				灰	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
10	杯蓋		1/2		3.6				灰黄褐	還元焰	ロクロ右回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
11	杯蓋	洞2次8-1	3/4	13.8	3.8	1.7			灰	還元焰	ロクロ右回転、高台は貼付、底部雑な整形。
12	杯蓋	第2トレンチ	1/2	17.6	4.2	3.1			褐灰	還元焰	ロクロ右回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
13	杯蓋	第1トレンチ上層	1/2		5.0				灰	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
14	杯蓋	洞47・35・50	1/2	13.0					灰	還元焰	回転方向不明、天井部中央回転ヘラ削り。
15	杯蓋		1/4	13.0					灰	還元焰	回転方向不明、天井部中央回転ヘラ削り。
16	杯蓋		1/4	16.0					灰	還元焰	回転方向不明、高台貼付か。
17	蓋	洞83	3/4	12.6	3.4	4.6			橙	酸化焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
18	蓋		完形	13.4	3.7	4.8			橙	酸化焰	ロクロ右回転、天井部中央は回転ヘラ削り、摘貼付。
19	杯	焚口下	1/3	13.7	8.5	4.7	0.62	0.34	黄灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転ヘラ削り。
20	杯	第1トレンチ上層	1/4	13.8	9.0	4.0	0.65	0.29	灰	還元焰	底部回転糸切り。
21	杯	第1トレンチ上層	1/2	13.2	8.4	3.1	0.64	0.23	灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
22	杯	洞46	1/4	13.2	8.0	3.9	0.61	0.30	灰白	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
23	杯	洞4	3/4	12.2	7.2	3.6	0.59	0.30	橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
24	杯	第1次トレンチ上層	1/4	12.9	7.6	3.5	0.59	0.27	橙	酸化焰	ロクロ右回転か、底部回転糸切り。
25	杯	洞83	完形	12.6	7.0	3.5	0.56	0.28	橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
26	杯		1/2	13.8	7.6	3.6	0.55	0.26	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
27	杯		完形	13.0	7.0	3.4	0.54	0.26	橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
28	杯		1/4	15.1	8.2	4.8	0.54	0.32	灰	還元焰	回転方向不明、底部周辺部回転ヘラ削り。
29	杯	洞2次4-25	1/4	13.1	7.0	3.5	0.53	0.27	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。
30	杯		1/4	11.2	6.0	2.9	0.54	0.26	褐灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
31	杯		1/2	14.4	7.6	3.5	0.53	0.24	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
32	杯	洞7	1/3	12.8	6.5	3.5	0.51	0.27	灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
33	杯		1/2	13.1	6.5	3.7	0.50	0.28	橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
34	杯		1/6		6.6				にぶい黄橙	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
35	杯		2/3		7.2				暗オリーブ灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。
36	杯	洞47・50	1/4	12.6	7.8	3.8	0.62	0.30	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
37	杯			11.5	7.0	4.0	0.61	0.35		還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
38	杯	洞2次4-28	1/5	12.7	7.7	4.0	0.61	0.31	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。内面に降灰付着。
39	杯	洞47	1/3	12.0	7.2	3.9	0.60	0.33	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
40	杯	洞51	1/4	11.8	7.0	4.0	0.59	0.34	灰	還元焰	ロクロ右回転か、底部回転糸切り。
41	杯	洞51	1/4	11.8	7.0	3.8	0.59	0.32	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
42	杯	洞47	1/4	12.4	7.3	3.7	0.59	0.30	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
43	杯		完形	12.0	7.0	3.9	0.58	0.33	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
44	杯	洞49	破片	11.6	6.6	4.0	0.57	0.34	灰白	還元焰	ロクロ左回転か、底部回転糸切り。
45	杯	洞49	1/4	12.2	7.0	4.0	0.57	0.33	黄灰	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
46	杯	洞3-12	1/4	13.4	7.3	4.1	0.54	0.31	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
47	杯	洞2次2-6	完形	12.9	6.8	4.1	0.53	0.32	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
48	杯		完形	13.2	7.0	4.7	0.53	0.36	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
49	杯	洞7	1/5	12.2	6.4	3.7	0.52	0.30	灰	還元焰	ロクロ回転方向不明。
50	杯	洞53・55・59	1/3	12.6	7.6	3.9	0.60	0.31	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
51	杯		完形	13.0	6.8	4.1	0.52	0.32	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。重ね焼き痕あり。
52	杯	洞49	1/4	12.6	6.0	3.8	0.48	0.30	淡黄	酸化焰	底部回転糸切り。
53	杯		底部片		6.9				灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
54	杯	洞51	1/3	11.5	6.6	3.9	0.57	0.34	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
55	杯	洞48	1/4	11.9	6.4	4.1	0.54	0.34	明黄褐	酸化焰	底部回転糸切り。
56	杯	66・68	1/3	12.0	7.0	3.7	0.58	0.31	浅黄	酸化焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
57	杯		1/4	11.6	6.4	4.5	0.55	0.39	灰黄	還元焰	回転方向不明底部回転糸切り。
58	杯	洞18	底部	11.8	5.6	4.0	0.47	0.34	灰白	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
59	杯		1/2	12.8	7.0	4.0	0.55	0.31	灰	還元焰	ロクロ左回転か、底部回転糸切り。
60	杯	洞32	底部片	12.1	6.0	4.6	0.50	0.38	灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。外面に降灰付着。
61	杯		1/2	12.0	6.4	3.5	0.55	0.29	黄灰	還元焰	砂粒付着、ロクロ右回転、底部回転糸切り。
62	杯		1/4	13.0	7.0	4.5	0.54	0.35	黒褐	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
63	杯		1/5	14.0	7.0	5.1	0.50	0.36	灰	還元焰	回転方向不明、底部回転糸切りか。
64	杯		破片	11.6	6.2	3.7	0.53	0.32	黄灰	還元焰	回転方向不明。
65	杯	洞62		11.8	7.0	3.8	0.59	0.32	暗灰黄	酸化焰	回転方向不明、底部回転糸切り。

NO.	器種	注記	残存	口径	底・口径	器高	底/口	高/口	色調	焼成	技法・特徴
66	杯		1/2	12.3	6.2	3.5	0.50	0.28	灰褐	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
67	杯	洞56・67・70	1/3	12.4	7.0	4.1	0.56	0.33	浅黄橙	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
68	杯	洞69	1/4	10.6	6.1	4.2	0.58	0.40	橙	酸化焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
69	杯	洞76・79	1/5	11.4	5.6	3.6	0.49	0.32	明褐	酸化焰	回転方向不明。
70	杯	洞70	1/2	11.0	6.2	3.1	0.56	0.28	灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
71	杯	洞70	1/2	11.6	6.5	3.9	0.56	0.34	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
72	杯		1/5	12.0	6.6	3.8	0.55	0.32	黒褐	酸化焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
73	杯	洞2次3-3	1/2	12.0	7.5	3.6	0.63	0.30	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
74	杯		1/4	12.4	6.8	3.6	0.55	0.29	灰白	酸化焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
75	杯			12.4	7.0	3.5	0.56	0.28	橙	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
76	杯			13.4	7.0	3.9	0.52	0.29	褐灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
77	杯		2/3	12.0	6.0	4.1	0.50	0.34	灰白	還元焰	ロクロ左回転、底部回転へラ削り。
78	杯		3/4	13.0	7.0	3.6	0.49	0.28	橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
79	杯	洞51	1/5	13.6	7.8	4.8	0.57	0.35	灰白	還元焰	底部回転糸切り。
80	杯	洞24	1/3	12.2	6.0	4.2	0.49	0.34	浅黄橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
81	杯		1/2	9.7	6.2	3.2	0.64	0.33	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
82	杯	洞39	1/3	10.5	5.6	3.8	0.53	0.36	灰	還元焰	ロクロ右回転か、底部回転糸切り。
83	杯	洞69	1/4	10.6	5.4	3.4	0.51	0.32	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
84	杯		1/3	11.0	6.4	3.6	0.58	0.33	灰	還元焰	回転方向不明。
85	杯	洞46・49	1/3	11.3	7.0	4.0	0.62	0.35	灰	還元焰	底部回転糸切り。
86	杯		1/4	11.4	6.6	3.7	0.58	0.32	灰黄	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
87	杯	洞46	1/4	11.4	7.0	3.9	0.61	0.34	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
88	杯	洞42	1/3	11.4	6.7	3.6	0.59	0.32	灰	還元焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
89	杯		1/2	11.4	6.0	3.6	0.53	0.32	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
90	杯		完形	11.6	6.9	3.3	0.59	0.28	灰黄	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
91	杯		完形	11.8	6.4	3.5	0.54	0.30	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
92	杯	洞46	1/4	12.0	6.6	4.1	0.55	0.34	灰白	還元焰	底部回転糸切り。
93	杯	洞70	1/2	12.0	6.6	3.4	0.55	0.28	浅黄橙	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。外面黒色。
94	杯	洞56	1/3	12.0	6.0	3.8	0.50	0.32	浅黄	酸化焰	底部回転糸切り。
95	杯		1/4	12.0	6.0	3.9	0.50	0.33	黒褐	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
96	杯		1/3	12.2	7.4	4.2	0.61	0.34	淡黄	還元焰	回転方向不明、底部回転糸切りか。
97	杯	洞2次2-6	2/3	12.2	6.2	3.4	0.51	0.28	灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
98	杯	洞35・46	1/3	12.2	6.8	4.0	0.56	0.33	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
99	杯		1/4	12.2	7.0	4.1	0.57	0.34	灰褐	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
100	杯	78	1/3	12.3	6.4	3.6	0.52	0.29	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
101	杯	洞46・49	1/2	12.4	7.8	3.7	0.63	0.30	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
102	杯	洞47	1/3	12.4	7.1	4.1	0.57	0.33	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
103	杯		1/2	12.4	7.0	3.9	0.56	0.31	黒褐	酸化焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
104	杯		1/3	12.4	7.4	3.9	0.60	0.31	淡黄	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
105	杯		1/2	13.2	6.6	3.9	0.50	0.30	橙	酸化焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
106	杯	洞2次2-6	1/3	12.7	6.8	4.4	0.54	0.35	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
107	杯	洞47	1/2	12.5	7.0	3.9	0.56	0.31	灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
108	無台碗		1/3	14.5	9.0	5.2	0.62	0.36	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
109	無台碗	洞83	2/3	14.6	7.3	5.1	0.50	0.35	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
110	無台碗	洞48・49	1/3	13.8	6.8	5.3	0.49	0.38	灰白	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
111	無台碗	洞44	1/3	13.8	7.0	5.5	0.51	0.40	灰黄	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
112	無台碗	洞2次2-13	底～体		8.0				灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
113	無台碗		1/4	14.2	6.4	5.2	0.45	0.37	褐灰	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
114	碗		口縁部片	16.0					灰白	還元焰	回転方向不明。
115	コップ型碗	洞46・35	1/4	10.2	7.0	6.7	0.69	0.66	灰黄	還元焰	回転方向不明、底部回転糸切り。体部最下位に回転へラ削り。
116	台付碗		小片	11.8	6.6	4.8	0.56	0.41	灰	還元焰	回転方向不明。
117	台付碗		1/2	11.6	6.4	4.8	0.55	0.41	灰	還元焰	底部回転糸切り後ナデ
118	台付碗	洞46	1/3	12.0	7.0	4.4	0.58	0.37	灰	還元焰	底部回転糸切り。
119	台付碗	洞46	1/4	12.2	7.2	4.8	0.59	0.39		還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。底部下位回転へラ削り。
120	台付碗		底部	11.8	7.2	5.7	0.61	0.48	灰白	酸化焰	底部回転糸切り。
121	台付碗	洞84	1/2	16.1	8.8	8.0	0.55	0.50	浅黄橙	酸化焰	ロクロ左回転か、底部回転糸切り。
122	台付碗		1/2	18.0	10.4	8.0	0.58	0.44	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
123	台付碗	洞46	底部		7.7				暗灰黄	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
124	台付碗	第1次トレンチ上層	底部		6.9				灰白	還元焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
125	台付碗	洞51	1/4		9.2				灰白	還元焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
126	台付碗		3/4	14.8	9.4	8.6	0.64	0.58	灰	還元焰	ロクロ左回転、底部回転糸切り。
127	碗	洞68・78	1/2		16.0				灰褐	還元焰	ロクロ整形
128	台付碗		1/4	16.7	6.9	7.0	0.41	0.42	灰黄橙	酸化焰	ロクロ右回転、底部回転糸切り。
129	台付盤	洞46		17.4	9.5	4.2			灰	還元焰	ロクロ右回転か、底部回転ナデ、高台貼付。
130	台付盤	洞18		18.0	10.0	4.0			灰	還元焰	ロクロ左回転、天井部中央は回転へラ削り、摘貼付。

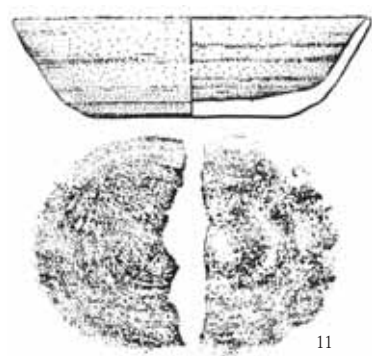
NO.	器種	注記	残存	口径	底・口径	器高	底/口	高/口	色調	焼成	技法・特徴
131	台付盤		1/3	17.9	11.6	3.8			灰	還元焰	回転方向不明、高台貼付、底部回転ナデ。中央に回転糸切りが残る。
132	台付盤	洞54	完形	18.0	9.8	4.4			灰白	還元焰	ロクロ右回転か、底部回転ヘラナデ、高台貼付。
133	台付盤	洞80	口～体片	20.0	10.8	3.9			灰白	還元焰	回転方向不明、高台貼付、底部回転ナデ。
134	高杯	洞51	1/2		10.8				灰	還元焰	ロクロ左回転、脚部は貼付。
135	鉢	洞35・46	口～体片	14.3	9.2	9.4	0.64	0.66	灰	還元焰	ロクロ右回転か。
136	鉢		1/3	16.6	9.2	9.4	0.55	0.57	灰	還元焰	回転方向不明、底部回転糸切り。
137	鉢	洞47・48	1/3	17.0	11.0	10.7	0.65	0.63	灰	還元焰	ロクロ右回転、底部回転ヘラ削りか。外面に降灰付着。
138	鉢		口～体片	26.0					灰	還元焰	ロクロ左回転か。
139	鉄鉢		完形	16.2					灰白	還元焰	ロクロ回転不明。鉄鉢か。
140	有頸鉢	灰原	口～体片	23.0					灰	還元焰	ロクロ整形。
141	有頸鉢	洞57	口～体片	25.0					灰	還元焰	胴部中位：平行叩きが残る、胴部上位～口縁部ロクロ整形。
142	有頸鉢	灰原	口縁部片	27.0					灰	還元焰	ロクロ整形、胴部はカキ目
143	有頸鉢		口～体片	32.8					褐灰	還元焰	胴部中位：平行叩きが残る、胴部上位～口縁部ロクロ整形。
144	有頸鉢	墓地	口～底片	36.2					にぶい橙	酸化焰	胴部外面平行叩き、内面無文アテ具、胴部上位～口縁部ロクロ整形。
145	短頸壺蓋		破片	11.0					灰	還元焰	回転方向不明、天井部回転ヘラ削り。罅状凸帯は貼付。
146	短頸壺		口～胴片	9.0					褐灰	還元焰	ロクロ整形。蓋付きか、口縁部に降灰無。
147	長頸壺	第1トレンチ上層	脚部片		10.2				灰	還元焰	回転方向不明。
148	長頸壺		脚部片		8.7				灰	還元焰	ロクロ左回転か。
149	長頸壺	洞69	底部片		10.4				黒灰	還元焰	ロクロ右回転、高台貼付、底部回転ヘラナデ。
150	長頸壺		1/3						灰	還元焰	ロクロ左回転か、高台剥落。
151	横瓶	2次第1トレンチ	胴部片						灰白	還元焰	ロクロ整形、胴部中位は平行叩き痕、内面に無文アテ具痕が残る、閉塞部はヘラナデ。
152	横瓶		胴部片						灰	還元焰	ロクロ整形、胴部中位は平行叩き痕、内面に無文アテ具痕が残る。
153	甗		口～胴片	36.0					灰白	還元焰	ロクロ整形、罅状凸帯は貼付。
154	甗		口～胴片	34.0						還元焰	ロクロ整形、罅状凸帯は貼付。
155	甗	80・86・88・90	3/4	27.7	18.4	49.1			にぶい褐	酸化焰	口縁部ロクロ整形、胴部外面は平行叩き、内面は無文アテ具。
156	甗		口～胴片	27.2					にぶい橙	酸化焰	口縁部ロクロ整形、胴部外面は平行叩き、内面は無文アテ具。
157	甗		口～頸片	22.2					灰	還元焰	口縁部ロクロ整形。
158	甗	洞10	破片	24.4					灰	還元焰	口縁部ロクロ整形。
159	甗	洞36	口縁部片	25.8					灰黄	還元焰	口縁部ロクロ整形。
160	甗		破片						黒灰	還元焰	口縁部ロクロ整形。
161	甗	10・60	胴～底片		20.0				にぶい黄橙	酸化焰	胴部外面平行叩き、内面無文アテ具。
162	甗		胴～底片		13.2				橙	酸化焰	胴部外面平行叩き、内面無文アテ具。
163	甗	61	口～胴片	18.6					灰	還元焰	口縁部ロクロ整形。胴部は内外面ともナデ消し。
164	甗		口～胴片	16.8					橙	酸化焰	口縁部ロクロ整形。
165	甗		口～胴片	29.4					にぶい橙	酸化焰	胴部外面平行叩き、内面無文アテ具、底部ヘラナデ。
166	甗		口縁部片						灰褐	還元焰	胴部 外面平行叩き、内面無文アテ具が残る
167	甗	洞82	口縁部片						灰	還元焰	5段に区画、4段に波状文。
168	甗		口縁部片						灰白	還元焰	ロクロ整形、口縁部に波状文。
169	甗	洞51	口縁部片						灰	還元焰	ロクロ整形、口縁部に波状文。

世紀第3四半期に想定した。この点を考慮すると洞A支群は深沢B支群以前の9世紀第2四半期には操業が終了したと想定するのは妥当と考えられる。

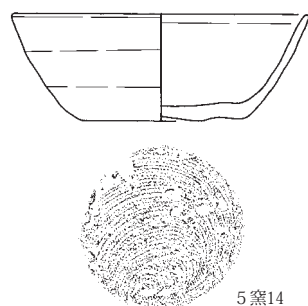
次に操業開始の年代であるが、生品西浦遺跡D区18号竪穴建物より有台碗Aと同等の形態が出土している。しかし、D区18号竪穴建物の杯をみると体部に丸みがなく直線的であり、D区18号竪穴建物の年代である8世紀第4四半期に操業が開始したとは想定できない。その後の生品西浦遺跡10期、戸神諏訪遺跡Ⅲ段階では洞A支群杯Aと同様な形態である生品西浦遺跡杯Db、戸神諏訪遺跡杯A形態が出土しており、この時期に操業開始年代を求めることができる。

すなわち、洞A支群1号窯～3号窯の操業期間は9世紀第1四半期から第2四半期に比定できる。しかし、1号窯と2号窯は重複関係にあるのと発掘調査の見解では焼成面は1面であると記載されている。こうした点からは1号～3号窯それぞれの操業期間は限定されるとみられ、半世紀のなかで絶え間なく須恵器を供給していたかは疑問である。

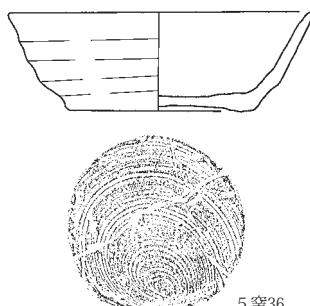
沢入A支群 杯



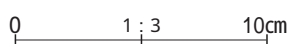
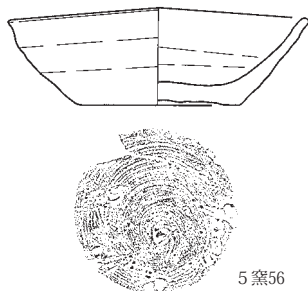
深沢支群 杯A a



杯A b



杯A c



第12図 沢入A支群・深沢B支群杯の分類

おわりに

今回の検討では、4号窯との関係やロクロ回転方向が判別できる製品のうち3割が左回転であったこと、瓦の生産など検討課題は残るが、紙幅の都合上今後の課題とした。

なお、今回の検討にあたっては月夜野町(現みなかみ町)教育委員会より特段の御配慮をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。また、生産史研究会々員をはじめ多くの方々からご教示・ご指導をいただいた。

なお、本稿は1・2項と土器実測を綿貫、3～5を神谷が分担した。

参考・引用文献

- 山崎義男 1941「上野國利根郡月夜野二窯址に就いて」『古代文化』第12巻第4号日本古代文化学会
群馬歴史考古同人会1983『土器部会研究資料NO. 2』
大江正行 1984「群馬県における古代窯業跡群の背景」『群馬文化』第199号群馬県地域文化研究協議会

大江正行・中沢悟 1985「第3章調査成果と整理の考察」『月夜野古窯跡群』月夜野町教育委員会

大西雅広 1983「第7章まとめ ロクロ左回転の須恵器」『大釜遺跡 金山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

関晴彦 1985「第IV章まとめ 5 奈良・平安時代の土器」『敷田遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

中沢悟 1986「第6章調査成果の整理と考察 (3)月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」『大原Ⅱ遺跡 村主遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

三浦京子 1990「第4章調査成果 第2節遺物 第2項 奈良平安時代の土器」『戸神諏訪遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

三浦京子 1993「第IV章調査の成果と課題 第3節 平安時代の土器編年」『戸神諏訪Ⅲ遺跡』沼田市教育委員会・群馬県企業局

酒井清治 1995「I 関東」『須恵器集成図録 東日本編Ⅱ』雄山閣

神谷佳明・桜岡正信 1997「群馬県 律令制成立期の須恵器の系譜・律令制変質期の須恵器の系譜」『古代生産史研究会'97シンポジウム東国の須恵器一関東地方における歴史時代須恵器の系譜一』

神谷佳明 2009「出土土器について」『生品西浦遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

神谷佳明 2016「第5章 発掘調査の成果」『月夜野古窯跡群 深沢B支群』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1982『敷田東遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書21集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『大釜遺跡・金山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書25集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『糸井宮前遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書40集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『敷田遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書41集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書52集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書54集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1987『深沢遺跡・前田原遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書68集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『後田遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書76集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『戸神諏訪遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書98集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『下川田下原遺跡・下川田平井遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書147集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『石墨遺跡(沼田チェーンベース地点Ⅰ)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書286集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『新田西沢遺跡・新田平林遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書334集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『生品西浦遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書463集

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2016『月夜野古窯跡群 深沢B支群』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書609集

月夜野町遺跡調査会1985『関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書』

月夜野町教育委員会1973『群馬県利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告』

月夜野町教育委員会1985『月夜野古窯跡群』

月夜野町教育委員会1986『善上遺跡』

沼田市教育委員会1985『石墨遺跡』

沼田市教育委員会1992『沼田北部地区遺跡群(戸神諏訪Ⅱ遺跡)』

沼田市教育委員会1993『戸神諏訪Ⅲ遺跡』

沼田市教育委員会1993『沼田北部地区遺跡群Ⅱ(町田十二原遺跡)』

沼田市教育委員会1997『沼田北部地区遺跡群Ⅵ 町田手古又遺跡・岡谷毛勝遺跡』

沼田市教育委員会2005『沼須地区遺跡群Ⅱ 川端遺跡・沼須城遺跡・西遺跡』

みなかみ町教育委員会2009『上組北部遺跡群』